

ヘーゲルのエーテル説

稲 生 勝

はじめに

ヘーゲルの自然哲学的側面の研究は、ヘーゲル研究の中でもっとも遅れている側面であるといえよう。それは、ヘーゲルの自然哲学自体が神秘的で、空想的であるとされ、また19世紀以降の自然科学のめざましい発達によりほとんど研究に値しないがごとく見られてきたことによると言えるだろう。ヘーゲルの思想形成史的研究においてすら、宗教的アスペクトや社会思想的アスペクトからのみ研究され、自然哲学的側面は看過されてきたのである。

しかし、現在、ヘーゲル研究は大きく進展し、特に、公刊されていなかった初期草稿が公刊され、若きヘーゲルがヘーゲル批判を行った者の論点を先取りしている節も見られ、ヘーゲルの全体像の見直しをせまっているという状況にあるといえよう。とすれば、ヘーゲルの中の生けるものと死せるものを峻別し、生けるものだけを取り出すというだけの研究態度は既に許されないのではなかろうか。ヘーゲル哲学の中の積極的側面、肯定的側面を継承するという作業の前提として、ヘーゲルをヘーゲルの時代に返し、自然哲学を含めたヘーゲルの全体像を描くことが要求されているのではないだろうか。

さらに言えば、ヘーゲルの自然哲学は、ヘーゲルの全体像を描くのに不可欠であるだけでなく、ヘーゲルが同時代の自然科学と格闘し、自らの思想を築いたものであるがゆえに、今日の科学や技術、あるいは自然を巡る諸問題を考える上での示唆を豊富に含んでいるとも言えよう。今日、われわれが直面している自然環境や科学技術について考える際、ヘーゲルの自然哲学は、数多くの有益な助言を与えてくれると思われる。

ここでは、ヘーゲルの思想形成に自然科学が与えた衝撃を探る手始めとして、まず、イエーナ期の自然哲学におけるエーテル (Äther) 概念を検討してみたい。⁽¹⁾

というのは、ヘーゲルは、その思想を確立していったイエーナ期に自然科学に強い関心を示しており、ヘーゲル自然哲学の研究には、イエーナ期の草稿の検討が不可欠であるとともに、イエーナ期の草稿における根本概念であるエーテル概念がヘーゲルの思想形成史においてたどる数奇な運命のゆえである。このエーテル概念のたどる道の解明はヘーゲルの思想形成史の一面を照射するのではないかと思われる。

このエーテルについて、ヘーゲルは『精神現象学』の「序文」で次のように述べている。

「絶対的他在における自己認識、このようなエーテルそのものは、学問の根柢であり、地盤である。すなわち、知一般である。」⁽³⁾

さらに、

「学は、自己意識が学とともに、学において生きることができるために、また生きるために、自らをこのエーテルのうちへと高めることを学の側から自己意識に要求する。」⁽⁴⁾

とも述べている。絶対的他在において自己を認識するというこのエーテルは、明らかに絶対知の立場に立っているといえよう。とすれば、このエーテルは、自然哲学の範囲内だけの概念でなく、ヘーゲル哲学全体を貫く根本概念であろう。

しかし、『精神現象学』ですら上述の引用箇所以外では、「絶対知」に出てくるだけである。なぜこのように根本的であって、重要な概念であったエーテルが使われなくなるのだろうか。この問題の解明を通じてイエーナ時代のヘーゲルの思想的格闘の一面を照射することができるであろう。

小論では、しかし、その予備作業としてヘーゲルによるエーテルの概念の獲得と1804—5年の自然哲学の草稿を中心にエーテル概念の展開を検討することにとどめる。

1 イエーナ期の自然哲学

1803年、シェリングがイエーナを去った後、ヘーゲルは独自の思索を展開し、次第にヘーゲル哲学体系に必要なカテゴリーを獲得していく。われわれは、この時期の自然哲学を中心にその姿の一端を描き出すことを試みようとしているわけだが、その前にまず草稿の構成を検討しておこう。

現在、イエーナ期の自然哲学の草稿は、アカデミー版全集第6巻、第7巻、第8巻⁽⁵⁾においてみる事ができる。これらの草稿は、キンメルレの筆跡鑑定によって年代が確定されたもので、例えば、第6巻の草稿などはローゼンクランツによってフランクフルト時代のもたとされていたのだが、キンメルレの筆跡鑑定はローゼンクランツ以来の見解を否定して、1803—4年のものと確定した。

ここでは、まず1803—4年のものとされる草稿から検討していこう。その構成は次のようなものである。

(1803—4年の自然哲学)

- I. (欠落していると思われる。)
- II. 地上の体系への移行
- III. 1, 力学
 - 2, 化学
 - 3, 物理学
 - 4, 有機体学

この草稿の初めの部分には、欠落があると思われる。それは、残存している草稿の初めの部分が、「地上の体系への移行」という見出しとなっていることからわかる。1804—5年の草稿が「太陽系 (System der Sonne)」から始まり、その次に「地上の体系 (Irdisches System)」となっていることから、「地上の体系への移行」の直前には「太陽系」があったのだろうことは容易に推察しうる。

キンメルレの調査によれば、⁽⁸⁾イエーナ大学の「講義告示」に載せられたヘーゲルの講義題目は、1801—2年の冬学期に「論理学および形而上学 (logica et metaphysica)」、⁽⁸⁾「哲学入門 (introductio in philosophiam)」⁽⁸⁾、翌年の夏学期には「自然法 (jus naturae)」が「哲学入門」に取って代わり、1803年の夏学期には「総合哲学概説 (philosophiae universae delineatio)」と「自然法」と「(a) 論理学および形而上学、すなわち先験的観念論と (b) 自然哲学と (c) 精神哲学とを含む思弁哲学の体系 (philosophiae speculativae systema, complectens a) logicam et metaphysicam sive idealismus transscendentalem b) philosophiam naturae et c) mentis)」となっている。このことから、1803年の秋には、「論理学・形而上学」、「自然哲学」、「精神哲学」の三部門で構成される哲学の構想ができ上がっていたことがわかる。また、残されている草稿と講義

題目表にはかなり強い関連性があることから、1803—4年の自然哲学の草稿の前には「論理学・形而上学」の草稿があったと思われる。ちなみに、自然哲学の後には「精神哲学」がある。

つまり、1803—4の草稿の欠落部分は、「論理学・形而上学」と自然哲学の冒頭部分で、後者は「太陽系」であったと思われる。

では、欠落している「太陽系」ではどのようなことが論じられていたのだろうか。1804—5年の草稿では、「太陽系」でエーテルが論じられている。1803—4年の「太陽系」もエーテルが論じられていたのだろうかことは、自然哲学に続く「精神哲学」の冒頭部分を見てもわかる。

「精神においては、絶対的な単一のエーテルが、大地の無限性を通じて、自分自身へと戻っていくのである。一般に、大地においては、エーテルの絶対的単一性と無限性とこのような一致が存在する。しかし、普遍的な流動性へと拡散して、それが拡散したところにおいては、自分を個別者として固定する。」⁽⁹⁾

さらに、自然哲学の最後の部分で、

「絶対的な内的な生成は、自己外存在としての絶対にして単一な物質、エーテルの自己内存在である。(中略)この単一性は、単に自然の本質がそうであるものとして、自然は精神の中に存在する。」⁽¹⁰⁾

と結んでいる。これらの箇所からわかるように、自然界を漂泊していたエーテルが「絶対的な内的な生成」を被ることにおいて、自然哲学が精神哲学へと移っていくのである。そのためには、エーテルが、能産的自然である質料、精神と同一である物質として自然哲学の端初でなければなるまい。1803—4年の自然哲学の冒頭部分、「太陽系」ではエーテルが論じられていたと思われる。

次に、1804—5年のものとされる草稿を検討することにしよう。その自然哲学の構成は次のようになっている。

[1804—5年の自然哲学]

I. 太陽系

II. 地上の体系

1, 力学

2, 物質の過程

3, 物理学

この草稿の年代確定についても、キンメルレ以前は1801年秋から1802年秋の

間とされるといった問題があった。これは、この草稿を初めて出版したエーレンベルクによるもので、⁽¹¹⁾ラッソンやローゼンツヴァイクもこれを承認した。⁽¹¹⁾しかし、⁽¹²⁾綿密な筆跡鑑定によるキンメルレの調査の結果、この草稿は1804年夏から1805年にかけてのものであることが確定された。

さて、この草稿には、1803—4年の草稿の最後の部分にあった「有機体学」がない。また、「精神哲学」もない。しかし、ヘーゲルが継続する意図をもっていったことは、この草稿の最後の部分を見ると明らかである。

「同様にその観念的な諸契機を内容としてまたは諸実体として持ち、そのような諸契機を同時に自己止揚するものとして持ちばさらに観念性およびそれらの存立、自己同一な実体、あるいは運動を完全に実体的にもつ、そういったこの過程が有機的なものである。」⁽¹³⁾

この後に「有機的なもの」について論ずるつもりであったのであろう。

この中断について、エーレンベルクはヘーゲルの思索がまだ完成していなかったことによると主張したが、ラッソンは講義用ノートをそこまで作る必要がなかったからだとする。1803—4年で既に「有機体学」を論じていることを前提すれば、少くとも、ヘーゲルの思索が未完成であったとは考えにくい。

1803—4年では欠落していた「論理学・形而上学」から自然哲学への移行および「太陽系」はどのようなものであろうか。ここでは「絶対精神」が「他者のうちに自分自身を直観する」精神、「自分自身に自己を関係させる精神」と規定され、この絶対精神からエーテル＝絶対物質 (die absolute Materie) が導き出されるのである。このことは「論理学・形而上学」の最後の部分を見ると明らかである。

「精神の理念すなわち精神そのものが他者のうちに自己を直観することは、直接、絶対精神として自分自身に自己を関係させる精神である。あるいは、無限性としての絶対精神であり、また、その自己認識に対して他者自身が自己となること、すなわち他者の同一性である。単一の絶対的な自分自身に自己を関係させる精神がエーテルすなわち絶対物質 (die absolute Materie) であるのが、自然である。」⁽¹⁴⁾

つまり、精神と同一である物質、絶対物質はエーテルと呼ばれ、いわば、自然の中に精神を閉じ込めたようにして自然へとなるのである。

そして、1804—5年の自然哲学の最初の部分には次のように述べられている。

「自然は、自分自身に自己を関係させる精神である。(中略)自然は拘束されない自己同一性としてでなく、拘束された精神として受け取られるべきである。この現実存在は、無限性であり、また、自分自身に反省する中でその拘束から解放され、自己をこの他者の中に絶対精神として見出す精神へのその移行と⁽¹⁵⁾なる。」

以上からわかるように、論理学・形而上学から自然哲学への移行を形作るものは、絶対精神であり、自然哲学は絶対精神の概念から導き出されたエーテルから始まるのである。言い換えれば、論理学・形而上学から自然哲学への移行において生じた概念がエーテルである。だから、「太陽系」においては、エーテルが主題的に論じられるのである。

最後に、『精神現象学』直前の1805—6年のものとされる草稿を見てみよう。この草稿にも欠落が存在しているは明らかである。というのは、自然哲学の草稿の最後の部分が文の途中で切れているからである。ただし、その後の「精神哲学」の草稿は残っている。欠落している部分は「有機体」の最後の部分からであり、そこには、自然哲学から精神哲学への移行に関する叙述があったと思われる。

1805—6年の自然哲学の構成については、ホフマイスターとヘリングとアカデミー版編集者であるトレーデおよびホルストマンとの間で見解が一致していない。

ホフマイスターによれば、

〔ホフマイスターによる1805—6年の自然哲学の構成⁽¹⁶⁾〕

I. 力学

II. 形態化と化学

A. 形態化

B. プロセス

C. 総体的プロセス

III. 物理学

1. 物理的物体の力学

2. 物理的物体の化学

IV. 有機体

とされるのだが、ヘリングはこれを批判する。ヘリングは「総体的プロセス」

について、

「このプロセスがようやく地上の物理学的プロセスにおいて本来の実在性をもちうる。」⁽¹⁷⁾

と述べ、次のような構成を主張する。

{ヘリングによる1805—6年の自然哲学の構成}⁽¹⁸⁾

I. 力学

II. 形態化と化学

1, 形態化

2, 化学

III. 総体的プロセス

1, 物理的物体の力学

2, 物理的物体の化学

3, 有機体

このヘリングを受ける形で、アカデミー版の目次は次のような構成を示している。

{アカデミー版編集者による1805—6年の自然哲学の構成}

I. 力学

II. 形態化と化学

A, 形態化

B, 化学

C, 総体的プロセス

III. 有機体

しかし、必ずしもヘリングに従ってはいない。

「総体的プロセス」で実在に達するというヘリングの見解は、天体などの地上でない自然と地上における力学、化学、有機体とを分離したもので、1804—5年の自然哲学が「太陽系」と「地上の体系」とを区別して論じていることと対応している。確かに、1805—6年の自然哲学の冒頭部、「力学」の最初は、1804—5年の「太陽系」で主題的に論じられていたエーテルが論じられている。「その概念へ戻っていく定在としての理念は、絶対物質、エーテルと呼ばれることができる。」⁽¹⁹⁾

しかし、1805—6年の「力学」をそのまま1804—5年の「太陽系」に対応させ

ることはできない。なぜならば、1804—5年と1805—6年の自然哲学にはいくつかの重要な相違点があるからである。

第一に、1804—5年の自然哲学では、「太陽系」において時間、空間の順に論じられているのに対し、1805—6年の「力学」では、順序が逆転し、空間、時間の順で論じられていることである。これは、『エンチクロペディー』の自然哲学でも同様である。第二に、エーテルの使用例が、1804—5年の草稿と比較すると、1805—6年の草稿ではずっと少ないことである。第三に、1805—6年の自然哲学では、経験科学による実験などの資料への言及が大幅に増加していることである。第四に、いくつかの新しいカテゴリー、例えば、「合目的性 (Zweckmäßigkeit)」などを用いていることである。

これらの相違点は、体系構成そのものが変化しているのだというほど大きなものではないだろうか。確かに、ヘリングが言うように、「総体的プロセス」において「地球への移行」などが言われるなど、「総体的プロセス」で地上の自然哲学が論じられており、ヘリングの見解は基本的には正しいと言えよう。しかし、1805—6年の「力学」を1804—5年の「太陽系」に単純に対応させたりすると、ヘーゲルの思想の発展を見逃す危険があることには注意しておかねばなるまい。

2 1804—5年のエーテル

1803—4年、1804—5年、1805—6年の自然哲学は、エーテル概念をもって始められている。このエーテルという概念は、アリストテレスによって、地上界が地・水・火・風の四元素で成り立っているのに対し、天上界を満たす元素、⁽²⁰⁾アイテル ($\acute{\eta}\acute{\alpha}\iota\theta\acute{\eta}\rho$) として用いられたもので、近代に到ると、自然科学において、光の波動説を主張する際、光の媒体として用いられるようになった。ヘリングによれば、ヘーゲルがエーテルという言葉を用いるようになったのはヘルダーリンとシェリングの影響だとされる。⁽²¹⁾ また、反原子論の立場から用いられたことも考えられよう。⁽²²⁾

エーテルは、イエーナ期の自然哲学では絶対物質 (die absolute Materie) と同一の意味で用いられている。⁽²³⁾ 1801年の段階では、ヘーゲルは一方で絶対的の同一性論の立場から精神と物質の統一をめざしつつ、もう一方でそのとき無限者と有限者との統一的把握をも企てていた (『差異』論文)。しかし、1801年段

階では質料は「スピノザ主義の原理」とされており（『就職テーゼ』）、能産的自然のごとく捉えられていて、有限者と無限者を統一的に把握するという課題は1803—4年以後にもちこされていたのだった。

では、1803—4年以後では、精神と物質はどのようにかわりあうのだろうか。それを絶対精神であるエーテルの概念を検討しつつみていこう。

われわれとしてはば1803—4年の自然哲学から順次見ていきたいが、1803—4年の自然哲学にはエーテル論が展開されていたと思われる部分（「太陽系」？）が欠落している。そこで1804—5年の自然哲学におけるエーテル概念の規定とその展開からみていくことにしよう。

既に簡単に触れたが、論理学・形而上学から自然哲学への移行において生ずる概念がエーテルである。だから、まずヘーゲルの自然の規定をみてみよう。

「自然の精神は隠れた精神であり、それは精神の形態においては現われない。それは、認識する精神にとってのみ精神である。すなわち、即自的に精神なのであって、対自的に精神なのではない。だからこそ、それは同一性においてのみ自分自身に関係するのであって、他者の存在として、自分自身を止揚した存在として自分自身に関係するのではない。だからこそ、それは、他者としての精神である。」⁽²⁴⁾

つまり、自然は精神であるが、自分で自分が精神であると自覚しているのではなく、即自的に精神であるに過ぎない。しかし、自然認識者の対象とはなる。だから、自然は「他者としての精神」なのである。

「太陽系」の最初でも次のように述べられている。

「絶対精神は、自分を絶対精神として、自分で認識しなければならない。精神は、精神が生ける神として存在していることを認識しなければならない。自分が絶対精神として、ある他者にならなければならない。この他者の中に自分を見出さなければならない。すなわち、精神は自分を自分自身の他者としつつ、同時に、絶対的に自己同一であるときのみ、生ける神である。他者としての絶対精神である自然は、その実在性と、その中で理念が自己を循環する諸契機を無差別の形態において、つまり、存立の無関与において、展開する絶対精神である。」⁽²⁵⁾他者において自己を認識する「絶対精神」が「生ける神」であるとすれば、他者としての「絶対精神」が自然である。ここでは、自然における理念の自己循環がいわれていることに注意をしておきたい。

「絶対精神」としての自然とは、あるいは自己を認識する「絶対精神」と対立する「絶対精神」とは何だろうか。

「…この純粋な不動の静として、運動からというより、運動の中で自分に戻るものであり、すべての事物の絶対的な根拠であり、本質である。それがエーテル、絶対物質であり、それは絶対的に弾性的なもの、あらゆる形相を拒絶するものであり、同様にそれゆえ、絶対的に柔軟であり、あらゆる形相を自己に与え、表現するものである。エーテルは、自分の絶対的自己同一性の側面として絶対精神である。すなわち、それは、その意味で純粋な自分自身への関係としての精神であり、そして、それゆえに自己同一性の規定性として自分自身を認識する精神に対立するのである。エーテルは、生ける神ではない。なぜなら、エーテルは、単に神の理念であるだけであり、生ける神は、自分自身を認識するその理念から、そして他者の中において、自分自身として、その自分自身を認識する。しかし、エーテルは、自分自身に自分を関係させる絶対精神であり、自分自身を絶対精神として認識していない。」⁽²⁶⁾

自己を自己として認識した「絶対精神」に対立するものがエーテルである。だから、エーテルは自己を自己として認識する「絶対精神」である「生ける神」ではない。つまり、エーテルは「他者としての絶対精神」であり、自己をまだ「絶対精神」と認識していない「絶対精神」である。

認識していなくとも「絶対精神」であるというのは、一切の形相を取り除いた質料ということであり、逆にどんな形相をも表現しうる質料ということである。だから、あらゆる存在の根拠であり、本質なのである。つまり、絶対物質であるエーテルは、それ自体としては一切の形相を取り除いてあるのだが、潜在的には万物でありうるのである。エーテルとは、存在である。

「エーテルが万物に浸透するのでなく、エーテル自体が万物なのである。(中略) 存在であると同時に無であるという絶対的の不静である。」⁽²⁷⁾

1804—5年のヘーゲルは、さらに続けてエーテルを規定していく。つまり、エーテルは、存在であると同時に無であり、静であると同時に不静であり、同であると同時に不同であるという概念である。⁽²⁸⁾

また、エーテルが外に現われる (erscheinen=現象する) ことは、語ることでありとされている。

「エーテルが自分自身で語ることが実在であり、すなわち、エーテルがエー

テルとして自分自身に無限に自己同一であることである。この自己同一性は無限性の聞き取り（das Vernehmen⁽²⁹⁾）であり、それはこの自己同一性が声の受け取りであるのと同様である。」

ここでは、「無限性」の概念が、エーテルからの「語ること」が「聞き取り」となる相互に転換する自己還帰の運動と把握されている。この自己還帰の運動の結果、有限者、個別者は、自己を止揚して、全体のモメントとなっていくのである。

以上みてきたように、エーテルは自己を「絶対精神」とは認識していない「絶対精神」、他者としての絶対精神」であり、いわば、無自覚のまま自分の中に絶対精神を閉じ込めて自然となるのである。そして、『差異』論文や『就職テーゼ』の「物質」や「質料」とは明らかに異なり、自己還帰的性格を持つようになってきている。

このエーテルの概念からあらゆるものが展開されるのだが、まずは運動を論じている。

「真に無限な自己を開示するエーテルとしての直接的な諸契機は、空間と時間である。この無限性というもの自体は、運動であり、そして、総体として諸領域⁽³⁰⁾あるいは諸運動の体系である。」

運動とはエーテルであり、その契機として時間と空間が位置づけられるのである。

「このエーテルの諸契機である時間と空間そのものは絶対的に単純であり、契機を固定するものとしてでなく、直接止揚されたものとして表現する無限である。この実在的無限が運動である。絶対物質つまりエーテルは、それが自己同一と無限なものの統一⁽³¹⁾でない限り、空間の空虚な抽象である。すなわち、物質とは本質的に運動である。」

物質とは運動を本質とするものだから、その根拠であるエーテルは自己同一と無限との統一⁽³²⁾である。そして、自己同一としての契機が空間であり、無限としての契機が時間である。

1804—5年のヘーゲルは、無限としての契機である時間から論じる。時間論は点として開始され、現在、過去、未来が相互に転換するものとされる。点としての現在はまだちに未来になるのだが、未来は非存在（Nichtsein）である。そうである限り、未来は現在の否定である。現在と未来の統一は過去であり、

過去は現在・未来とならぶ第三のものではない。なぜならば、
「現実の時間は現在と過去に対してのみの過去である」⁽³³⁾

のだから。そして、過去として叙述される時間は空間である。

空間は自己同一としてのエーテルの契機であり、点という否定的なものが運動することによって登場する。空間は時間なしに存在せず、空間と時間は永遠に相互転換を繰り返す悪無限である。空間論はさらに線、面と展開されていく⁽³⁴⁾。

では、なぜエーテルは運動を生み出すのであろうか。それは、エーテルが絶対的力を持っているからである。

「絶対的エーテルは光の本性であり、この自分自身における絶対的に単純な無限性を内的なものとして、絶対的な力として持っている。絶対的な力は対自的にその現存としてとどまる。これは、絶対的な運動であり、絶対的な静である。」⁽³⁵⁾

絶対的力であるエーテルが光の本性と考えられているのだから、自ら光り輝く星々のある世界、「太陽系」から自然哲学が展開されるのであろう。この絶対的力が現象すると地上におけるあらゆる自然となるのである。

以上のようなエーテル概念は、しかし、既に述べたように次第に使われなくなっていく。このエーテル概念の消滅については稿を改めて論じたい。

注

- (1)ヘーゲルのエーテル説については、E.Bloch, *Materie im dialektischen Weltgeist*, in: *Die Lehren von der Materie*, Frankfurt a.m., 1978; 田辺振太郎「ヘーゲル哲学における自然認識について」上、下、『思想』, 555号, 556号, 1970 などが論じているが、ヘーゲルの思想形成史における位置づけは明らかにしていない。
- (2)アッカーマンの生理学を聴講したり、シェルヴァーとともに植物学を研究したりしているし、また、1804年にはイエーナ鉱物学協会の準会員、ヴェストファーレン自然科学協会の正会員になり、1807年には物理学協会の名誉会員となっている。vgl. K. Rosenkranz, *G.W.F. Hegels Leben*, Berlin, 1844–unveränderter Nachdruck, Darmstadt, 1977
- (3)G.W.F. Hegel, *Phänomenologie des Geistes*, in: G.W.F. Hegel Werke in zwanzig Bänden Bd.3, S.29 (傍点は原文イタリック)
- (4)ebd.
- (6)Hegel *Gesammelte Werke*, Hamburg, Bd.6, Bd.7, Bd.8 (以下、例えばアカデミー版第6巻10頁をBd.6, S.10のように略記する。)

- (7) vgl. H. Kimmerle, Die Chronologie der Manuskripte Hegels in den Banden 4 bis 9, in: Bd. 8, Anhang, S. 348ff.
- (8) H. Kimmerle, Dokumente zu Hegels Jenaer Dozenttatigkeit (1801-1807), in: *Hegel Studien*, Bd. 4, 1967
- (9) Bd. 6, S. 265
- (10) ebd., S. 264f.
- (11) *Hegels erstes System*, hrsg. von H. Ehrenberg und H. Link, Heiderberg, 1915; *Jenenser Logik, Metaphysik und Naturphilosophie*, hrsg. von G. Lasson, Leipzig, 1923
- (12) H. Kimmerle, Die Chronologie der Manuskripte Hegels in den Banden 4 bis 9, in: Bd. 8, Anhang, S. 348ff.
- (13) Bd. 7, S. 338 傍点はゲシュペルト
- (14) ebd., S. 177f.
- (15) ebd., S. 179
- (16) *Jenenser Realphilosophie I*, hrsg. von J. Hoffmeister, Leipzig, 1932
- (17) T. Haering, *Hegel. Sein Wollen und Sein Werk. Eine chronologische Entwicklungsgeschichte der Gedanken und der Sprache Hegels*, 2 Bde., Leipzig u. Berlin, 1929-38-Neudruck, Aalen, 1963, Bd. 2, S. 458
- (18) ebd.
- (19) Bd. 8, S. 3
- (20) ヘーゲル自然哲学におけるアリストテレスの影響と思われる論点は、エーテルだけではない。地水火風の四元素説や有機体論的自然観などもアリストテレスから引き継いでいる。ちなみに、ヘーゲルはアリストテレスの『デ・アニマ』の翻訳も行っている。vgl. W. Kern SJ, Eine Übersetzung Hegels zu De Anima III 4-5, in: *Hegel Studien*, Bd. 1, 1961
- (21) T. Haering, op. cit., Bd. 2, S. 268
- (22) 原子論は、原子が真空中を運動することによって自然界の多様な現象を説明しようとする。古代ギリシアで原子論を主張したデモクリトスは原子を永遠に運動するものとして、第一原因などの神話的要素を除くことに成功した。また近代に至ってからも、自然科学の発展に貢献するところ大であったことは多言を要さない。しかし、批判がなかったわけではない。第一に、真空中における原子の運動を言うためには、真空を前提しなければならず、古代ギリシアでは、ないものがあるという概念上での理解の困難さが指摘された。また、近代では、真空を前提すると、光の波動説を主張する際、真空をも伝播する光の波の媒質は何かという困難が生じた。自然科学ではこの問題の解決のため、エーテルがもちだされた。第二に、アリストテレスによって批判されたことだが、原子の運動だけでは、物のもつ形相性や秩序が説明できないことである。近代の力学でも、例えば、万有引力の法則などで自然の秩序を説明しようとするが、万有引力そのものが、遠隔作用を認めざるを得ず、遠隔作用の説明に窮した。この遠隔作用の説明にもちだされたのもエーテルであった。第三に、原子とその永遠の運動だけで自然を説明するため、機械的

自然観と結びつきやすく、ラプラスの悪魔といわれる決定論さえ生まれた。その脅威にさらされたことも、ドイツ観念論が人間の自由や精神の能動性をいかに確保するかをめぐって展開していった一因であろう。

- (23)第一資料の意味では、中世哲学のマテリア・プリマの概念があるが、マテリア・プリマは最も神性から遠いものとされ、ヘーゲルのように質料を精神と同一視するのに適さないであろう。
- (24)Bd.7, S.185
(25)ebd., S.187
(26)ebd., S.188
(27)ebd., S.187
(28)ebd., S.188f
(29)ebd., S.190
(30)ebd., S.192
(31)ebd., S.203f.
(32)ebd., S.193
(33)ebd., S.194
(34)ebd., S.197ff.
(35)ebd., S.218